

学校だより・学級だよりを活用して 「書く」力を伸ばす

— 徹国語人

最近では、どこの学校だよりも、子どもたちの作品（文章・絵・版画）や活動している写真などが多く載るようになった。学級だよりを出す先生も増えてきて、そこにも、子どもの声や文章がよく登場する。

学校行事に参加した子どもたちの心の動きを、時をおかずに記録させたものには、彼らのはずむ気持ちや喜びの溢れた様子が、それぞれの学年なりに活写されている。学校だよりなどに自分の文章が載った子は、そのことが次の「書く」意欲につながるであろうし、友達の文章を読む立場に立つても、自分の文章にそれを生かすきっかけになる気がする。

たよりを定期的に編集し、発行するのは先生たちにとって、手間のかかる仕事だ。しかし、国語の時間に、書いたものを読み合うのとは違って、学校だより・学級だよりという発行物の中にあることで、書いた子どもも読んだ子どもも、真剣に文章と向き合うようになる。その意味でも、こうしたたよりを活用することが、子どもたちの「書く」力を伸ばすことにつながる。今回は、運動会に参加した子どもたちの特集作文号を取り上げてみた。

次に掲げたのは、『ガッツでがんばった運動会』を題にした、横浜市のある小学校の学校だよりである。

一年 たまいいれをやりました。あかぐみがかちました。ぼくはいっぱいながました。おもいつきりなげました。かってうれしかったです。

二年 わたしは、運動会ですずわりを、お年よりの人となりました。すずわりのすずにあたった玉がはねかえって、わたしにあたってしまつて少しいたかったです。それでもがんばって玉をいっぱいいっぱいながしたので、赤組のすずがわれて、とってもとってもうれしかったです。

三年 わたしは全体重を前にかけた。ドン。その音と同時にわたしは走った。思いつき手をふった。ためらうひまはぜんぜんなかった。頭の中は一位のことしかない。ゴール。少しふらつとした。しかし、すぐ立ち直った。けっかは二位だった。もっと走りたい。でも終わったものはしかたがない。銀のメダルをもらった。まだ息は、ハアハアとはやい。初めての銀。とってもうれしい。一年は銅。二年はびり。

（以下略、傍線は筆者）

以下、四年・五年・六年と続くわけだが、学年が上がるにつれて文章が長くなる。これを読んだ方たちも同じ感想をもつと思うが、全体の様子と競技・演技の一部にスポットを当てた自分の心情と動きが、会話や独り言も加わって立体的に表現されている。「そして」「しかし」「それで」などのつながり言葉も、上手に組み合わされている。この学校では、学校だよりを利用した

作文展を催したという。どの子どもみんな、ガッツでがんばった運動会であつたのだろつ。

次に掲げるのは、『うん動会がんばったね！』という題でクラス全員の短い文章を載せた大阪市立加島小学校三年一組の学級だより「大空」である。

・ダンス！ 加島ミッキーズをおどったとき、よくおどれたと思つています。自分では一〇〇点です。来年もがんばりたいです。

・ぼくは、うん動会のダッシュ加島ランナーズで、一位をとれなかったけど、ほめてもらつてうれしかった。

・ぼくは、空とぶじゅうたんで、もつのをがんばりました。のるのもやりました。ほんとうに空をとんでるみたいでした。

・ダンスでもう一つがんばった所がありました。それは、しんどくなつてもニコニコ顔でおどる所です。それを一番目ひょうにしていました。その目ひょうがたつせいできてうれしかったです。

ここでは四名のものを紹介したが、実際には、三十六名全員の文章が載っている。子どもたちは、ここに載った友達の文章を読んで、もう一度あの汗と笑顔にあふれた秋の一日を思い出すことができたはずだ。そして、書き方のヒントをいくつも学ぶことができたのではないだろうか。

『友達から学ぶ』という場づくりは、工夫すればいくつでも作ることができるが、どれも手間がかかるものだ。しかし、こうした学校だより・学級だよりを手にすると、その一手間を惜しまずに努力を重ねる先生が増えてきたことがわかり、うれしい限りである。

— 徹国語人にご意見・ご質問がある方は、広報部までお便りをお寄せください。
— 徹国語人がお返事をいたします。お便りは、誌上にて紹介させていただきます。お便りありますので、あらかじめご了承ください。
FAX: 03-3493-5483
E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp